ちょっと名大史

255

名大のハーン先生 ―名古屋で30年過ごした外国人教師―

現在、NHK朝の連続テレビ小説で、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の妻をモデルにした女性が主人公のドラマが放送されていますが、名大にも前身学校に外国人教師の「ハーン先生」がいました。

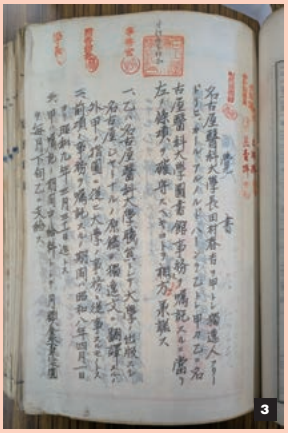
アーノルド・ハーンは、1869（明治2）年にドイツで生まれ、ベルリン大学で言語学を学んだ後、ハレ大学で哲学博士号を取得しました。1901年に来日し、もう一人のハーンも教師を務めた熊本の第五高等学校で教鞭を取った後、1909年8月に第八高等学校（名大旧教養部の前身）に採用されドイツ語を教えました。1910年8月からは愛知県立医学専門学校（名大医学部の前身）でも講師としてドイツ語等を教えるようになります。

1915（大正4）年には愛知医専を解雇となり、やがて八高も辞めることになって、1920年にはいったんドイツに帰国します。しかし、愛知医専が昇格した愛知医科大学の予科（大学の準備教育を行う高等教育機関）の講師として招聘され、翌1921年に再来日しました。

こちらのハーンも日本語の会話は上手くなかったようですが、読解力は相当なもので古今の日本文学に詳しく、ほかの日本文化にも造詣があり、謡曲に精通し、床の間には生け花を欠かしたことがなかったといいます。味噌汁の愛好家としても知られていました。こちらのハーンは家族を持ちませんでしたが、多くの教え子たちと交わり慕われていました。

1933（昭和8）年3月には予科が廃止され講師ではなくなりますが、引き続き名古屋医科大学（愛知医大を官立移管）附属図書館の事務嘱託として勤めました。名医大が出版する雑誌の原稿をドイツ語に翻訳する仕事などに従事し、高給を支給されており、大学はハーンを厚遇していたようです。

ハーンは在職のまま、病を得て1941（昭和16）年2月に名古屋帝国大学医学部附属医院で亡くなりました。こちらのハーンも日本に骨をうずめたのです。



1　愛知医専時代のハーン。本文の作成にあたっては、加藤鉦治（詔士）名誉教授の「もう一人のハーン先生」（『中日新聞』2002年6月27日夕刊）を多く参考にした。
2　1933年卒業の生徒たちと矢作川勘八峡（現豊田市）へピクニックに行った時の写真。
3　1933年に名医大附属図書館の事務嘱託に採用される際の覚書（一部）。この年、ハーンは「昔の愛知医学専門学校の思い出」と題する回想録（独文）を発表しており、貴重な歴史資料になっている。
4　ハーンの墓碑。ハーンの葬儀は名帝大の準医学部葬として行われ、教え子たちにより墓碑が造られた。名古屋市覚王山日泰寺にあったが、2000年に撤去された。

BRIEF HISTORY OF NAGOYA UNIVERSITY

■ **在学時の配布物**
（学生便覧、シラバス、試験問題、課外活動の資料…）
■ **教育・研究活動、大学・部局運営に関する資料**
（各種書類、会議のメモ、備忘録、スクラップ記事、写真…）
■ **校費による印刷物・刊行物**
（冊子、パンフレット、ポスター…）
■ **ご退職関係の記念冊子・記念論集・業績集…　　など**

※その他、ご処分予定の資料についても、まずは下記へご一報ください。

東海国立大学機構大学文書資料室
TEL 052-789-2046
Mail nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp